

2週間にわたる教育実習を終えて、教師という仕事のやりがいを実感することができた。教育実習に行く前は、正直、教師という仕事は生徒と保護者、同僚の先生方との間に挟まれながら、長時間労働を強いられる大変な仕事だとばかり思っていた。しかしながら、この教育実習を通して、教師という仕事に対する見方が大きく変化した。

私は母校で実習を行った。しかし、在学時とは異なる点が多く見受けられた。例えば、ICTを活用した授業やプロジェクターなどの設備、そして生徒の多様性を尊重する校風などが新設されていたのである。時代とともに、教育の在り方が変化していることを目の当たりにした。

実習1週目は観察実習を行った。自分が高校生の頃は授業を理解することに必死で、先生方の授業の工夫や教える技術の高さを考えたことがなかった。しかし今回、実習生として観察させてもらう中で、先生方がいかに生徒ファーストの授業を心がけているのかを感じることができた。簡潔でわかりやすい説明の仕方や生徒を授業に巻き込みながら楽しく学ばせるための工夫など、大学の座学では学ぶことのできなかった部分についても勉強することができた。

観察実習の中で、特に私が印象的だったのが、1年生の簿記の授業で行ったクイズ大会である。初めて簿記に触れる生徒達にとって、基本的なルールですら理解するには覚えることも多く、難しい。初期の段階で躓いてしまうと、苦手意識を持ってしまいかねない。そこで、楽しくグループで教え合いながら、個人の理解度も高められるようにと教科担任によってグループ対抗クイズ大会が開催された。生徒達を観察していると、準備の段階から優勝するためにチームで戦略を立てたり、簿記を苦手とする子に一生懸命教え合う姿が見受けられた。大会本番も終始イキイキとした顔で楽しみながら、一人一人が積極的に簿記に取り組む姿を見て、これこそ私の目指す理想の授業スタイルであると実感した。

実習2週目から教壇実習が始まった。生徒参加を大切にしたいという思いを持って初めての授業に臨むも、緊張もあり生徒を上手く授業の中に取り込むことができなかった。だからこそ、1回目の授業の失敗を繰り返さないよう、簡潔な説明や生徒同士で考える時間を増やしたり、発問の仕方を変えるなど授業の内容や構成を修正した。そうすると1回目より2回目、3回目と授業のクオリティも上がっていったように思う。

授業を理解できた時の生徒のイキイキとした表情や授業の質問、感想をくれる生徒の存在は私にとって励みになった。それだけ私の授業に関心を持ってくれた証拠だと思ったからである。生徒からの「授業のここがわからなかった」「難しかった」という正直なコメントは、自分の勉強不足を痛感させられる瞬間で、有り難く思う反面、生徒に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。だからこそ、「2度と生徒に同じ思いをさせないために、もっと自分自身が勉強しないと」という気持ちになった。こうした日々の授業に対する活力も生徒達からもらっていたように感じる。

このような正直な感想をくれたのは、日々のコミュニケーションがあったからだとも考えている。昼休みは生徒達と昼食を共にしたり、放課後は学園祭の準備に参加していた。こうした行動により、授業の中だけでは築けない信頼関係を築くことができたのではないかと考えている。このようにして日々のコミュニケーションの中で得られた、生徒達の興味関心のベクトルや彼らが求める教師像を授業の中に還

元したいと思い、導入や展開を工夫することもできた。

このように生徒との関わり合いの中でしか得られない学びを通じて、教師という仕事のやりがいに気づくことができた。教師は生徒に教えるのみならず、生徒から教えられることもあると今回の実習で痛感した。教師という仕事は確かに、通常の授業に加え、教材研究や部活動の顧問、保護者総会や三者面談など多岐にわたるハードな仕事である。しかし、先生方はそれ以上に日々の生徒の成長を感じられることの喜びが勝り、仕事の励みになっているのではないだろうか。

私は、当初、教師を志していた訳ではなかったが、今回の教育実習を通していつか教師という道を歩んでみたいと思った。まずは企業で働いて、自分自身の経験値を高めたい。その後の第二の人生で「生徒とともに学び成長できる」教師として生徒と忙しい日々を送りたい。そう思えるようになったのは、間違いなく今回の教育実習があったからである。今回の教育実習は私の教師への仕事観を変えただけでなく、私の人生を大きく変えた貴重な出来事となった。